

報告の背景・位置づけ

○報告の背景

- 本年4月に福島県内の4市(福島市、郡山市、相馬市、伊達市)が国に対して共通の課題の解決を要望。

【共通課題】

- 0.23 μ Sv/hという数値が短期的に達成すべき除染目標であるという誤解の解消
- 除染から復興への加速化 等

○報告の位置づけ

- この要望を受け国と4市で勉強会を重ね、その成果として、除染から復興へと進んでいくために、国と4市による今後の施策の共通的な認識とする方向性を取りまとめたもの。

○報告の柱(今後目指していく方向)

1. 個人の被ばく線量に着目した放射線防護
2. リスクコミュニケーションの充実
3. 汚染状況に応じた効果的な除染
4. 除染から復興へ

国が正しく伝えることができていなかったこと

○政府の放射線防護の長期的目標

- 追加被ばく線量が年間1mSv以下となること
- 除染はその手段の一つに過ぎない。
→ 年間1mSv ≠ 被ばくの限度 or 安全と危険の境界

○0.23 μ Sv/hという数値の意味

- 安全側に立った特定の生活パターンの条件の下で、「追加被ばく線量が年間1mSv」を空間線量率に換算した推計値。
→ 0.23 μ Sv/h = 汚染状況重点調査地域を指定する際の基準
0.23 μ Sv/h ≠ 除染の目標 or 除染直後に達成すべき空間線量率の目安

※年間追加被ばく線量1mSvから推定される空間線量率

$$\begin{array}{l}
 \text{①理論値であり、安全を見込んでいる} \\
 \text{②生活パターンにより変動する} \\
 \hline
 \begin{array}{l}
 1000\mu\text{Sv/年} \\
 (\text{マイクロシーベルト}) \\
 \parallel \\
 1\text{mSv/年} \\
 (\text{ミリシーベルト})
 \end{array}
 = [(0.19 \mu\text{Sv/時}) \times \{ (8 \times 1) + (16 \times 0.4) \} + 0.04 \mu\text{Sv/時}] \times 365 \text{ 日} \\
 \begin{array}{l}
 \parallel \\
 0.23 \mu\text{Sv/時} \\
 \text{地域指定の基準(空間線量率)}
 \end{array}
 \end{array}$$

時間 遮へい
時間 遮へい
屋外
屋内

自然由来の放射線

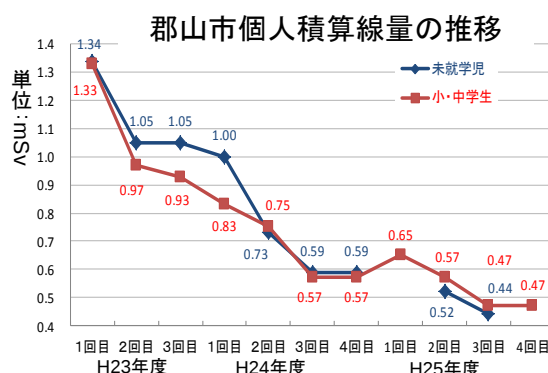
勉強会で整理した新たな知見

I) 4市における空間線量率の現状と今後の予測

- ① 除染及び物理減衰等により、この3年で空間線量率は確実に低下。
- ② 今後除染を行う地域においても、物理減衰等により空間線量率は低減。

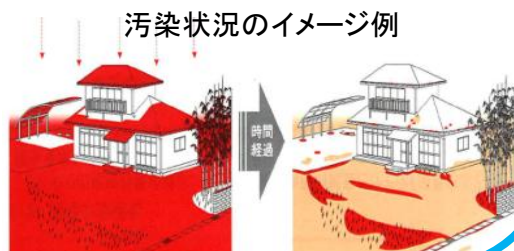
II) 個人線量関連

- ① 4市における多くの市民の年間追加被ばく線量は1mSv程度。
- ② 空間線量率が0.3～0.6 $\mu\text{Sv/h}$ 程度の地域では、住民の年間追加被ばく線量は平均的に1mSv程度。
- ③ 「1時間当たり0.23 μSv の地点で生活する人の年間追加被ばく線量が1mSvとなる」という仮定に基づく推計よりも、実際の個人被ばく線量は低くなる傾向。



III) 汚染状況の変化

- ① 事故当時の面的な汚染は、物理的減衰、風雨、人為活動(清掃、除雪等)により、屋根や壁では減少。
- ② 汚染は雨どい下や雨落ちなど局所に集中の傾向。



知見を踏まえた今後の対応

(1) 個人の被ばく線量に着目した放射線防護

- ・ 除染実施計画に基づく除染を実施した地域における、個人線量重視の放射線防護策の充実。
- ・ 個人線量計を配布して、個人の被ばく線量を把握。

個人線量計の例



(2) リスクコミュニケーションの充実

- ・ 以下について改めて正確かつ分かりやすく伝えるため、リスクコミュニケーションを充実。
- ① 除染に関する政府の方針
- ② 放射線に関する科学的知見
- ③ 除染の効果や、空間線量率と個人被ばく線量の関係などの新たな知見

(3) 汚染状況に応じた効果的な除染

- ・ 線量に応じて除染作業の実施内容や作業の実施の有無を判断。
- ・ 除染作業の重点化により、作業効果の向上及びスピードアップを図る。



(4) 除染から復興へ向けた不安解消・放射線防護策

- ・ 住民の不安を解消し、安心した生活を取り戻すため、(1)～(3)の対策を効果的に組み合わせた総合的な放射線防護策を検討・推進。